

国際オリンピック委員会 第5回世界女性スポーツ会議

議事要約

国際オリンピック委員会 第5回世界女性スポーツ会議

【カンファレンス概要】

世界 130 以上の国々より、国内オリンピック委員会、国際競技連盟、非政府組織、大学などのスポーツ関連組織の代表者 800 名以上が参加し、スポーツ界における女性の参加促進を促す方法について様々な議論が行われた。奇しくも 2012 年はアメリカで高校、大学のスポーツプログラムを女性に開放することを定めた「タイトル IX」の制定 40 周年と重なり、「一緒に、より強く:スポーツの未来」(Together Stronger: The Future of Sport)をテーマに活発な討議が進められた。

【カンファレンス開催場所】

JW マリオットホテル(米国カリフォルニア州ロサンゼルス)

【カンファレンススケジュール】

2012 年 2 月 16 日(木)

- | | |
|-------------|-------------------------------|
| 9:00~12:00 | 1. アフリカ国内オリンピック委員会連合(ANOCA)総会 |
| 9:15~12:15 | 2. ヨーロッパオリンピック委員会(EOC)総会 |
| 9:30~17:30 | 3. オセアニア国内オリンピック委員会(ONOC)総会 |
| 14:15~17:10 | 4. アジアオリンピック評議会(OCA)総会 |
| 14:30~17:30 | 5. パンアメリカンスポーツ機構(PASO)総会 |

2012 年 2 月 17 日(金)

- | | |
|-------------|--|
| 9:30~10:30 | 6. スポーツ界の女性リーダーシップ(Leadership Views on Women in the World of Sport) |
| 11:00~12:30 | 7. 進歩に向けたパートナーシップ(Partnership for Progress) |
| 14:30~16:00 | 8. 持続可能な責任へのペース設定(Setting the Pace for a Sustainable Responsibility) |
| 14:30~16:00 | 9. 行政、立法、そして姿勢(Government, Legislature and Attitudes) |
| 16:30~18:00 | 10. 医学の重要性(Matters Medical) |
| 16:30~18:00 | 11. 教育を通じた女性・少女の支援(Empowering Women and Girls through Education) |

2012 年 2 月 18 日(土)

- | | |
|-------------|---|
| 9:00~10:30 | 12. ロールモデルとリーダーシップ(Role Models and Leadership) |
| 11:00~12:30 | 13. 数字は知っている(It is all in the Numbers) |
| 11:00~12:30 | 14. スポーツ、平和、そして開発(Sport, Peace and Development) |
| 14:00~15:30 | 15. スポーツビジネス(Business of Sport) |
| 14:00~15:30 | 16. 女性スポーツとメディア(Women, Sport and the Media) |
| 16:00~17:30 | 17. 性差のないスポーツ社会に育って(Growing Up in a Gender-Balanced Sporting Society) |
| 17:30~18:00 | 18. 閉会式 |

1. アフリカ国内オリンピック委員会連合(ANOCA)総会

【セッション概要】

日時: 2012年2月16日(木)午前9時～午後12時

出席者: ジャック・ロゲ 国際オリンピック委員会 会長
 アニタ・デフランス 国際オリンピック委員会 女性スポーツ委員会代表
 アンゴラ・エジプト・ザンビア・ナミビアなどのアフリカ諸国の女性スポーツ委員

【セッション内容要約】

■ 国際オリンピック委員会より

ジャック・ロゲ（国際オリンピック委員会会長）

- 様々な理由（経済的・政治的・社会的理由）で女性のスポーツ参加が遅れているが、それを改善していかなければならない。
- IOCは職員の20%を女性にする計画であり、また資金の94%を普及活動や発展途上国に費やしている。
- 女性のスポーツ進出をサポートするメンター（助言者）を増やしていかなければならない

アニタ・デフランス（国際オリンピック委員会女性スポーツ委員会代表）

- スポーツは生まれながらにして持つ権利（Birth Rights）であり、この大切な権利を子どもたちの世代に受け継いでいかなければならない

■ アフリカオリンピック委員連合の活動報告

アフリカ各国の女性スポーツ委員

- ポジションペーパー（政策説明書）を作成中
- 女性リーダーシッププログラムを用意
 - 女性のスポーツ界への進出（選挙など）をサポートする
 - 他力本願にならない、女性自身の意志を促進するプログラム（男性を非難しても始まらない）
- 言語的なコミュニケーションの問題がある
 - 英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語などが混在
- 男性をうまく活用する
 - 男性の中に女性のサポーターを増やす（女性だけでやろうとするのではなく、男性の声を通じて効果的に活動を広げていく）
- Capacity Building Program（能力強化・向上プログラム）
 - 女性コーチや女性審判も対象に含める
- メディアの活用を積極的に進めるべき

■ 質疑応答

セッション会場の参加者より

- 直面する問題を専門的に取り扱う小委員会を設置した方がいいのではないか？
- 直面する問題を解決するために研究活動を充実した方がいいのではないか？
- メディアとの接触
 - 「男性スポーツの方が面白い」というメディアの常識で、女性の場合はルックスだけ取り上げられる」
 - こうした偏見を修正できる女性のジャーナリストが少ない
 - メディアも ANOCA のメンバーに取り入れるべき
- 女性スポーツの分野で **Capacity Building**（能力強化・向上）を進めるにあたり、具体的なアクションプランがあった方がよい
- 女性を指導的立場に輩出するだけでなく、若い子どもたち（少女たち）にスポーツ大会に参加してもらうなどの競技スポーツへの参画を活性化させる必要もあるのではないか
- トレーナーや審判などのフィールド上でも女性の存在感を増やすべき（男性の試合でも女性が活躍することがあってよい）
- 子どものロールモデルになるような女性を様々なレベルで増やすべき
- 後継者育成の必要性（**Participation & Sport management**）
- 既存のガバナンスフレームワークに女性の人材を送り込むことが先決
- ANOCA で議論することが良いことだが、議論ばかりで先に進まない。KPI（Key Performance Indicator の略で「重要業績指標」）を設定した具体的なアクションプランが必要。

2. ヨーロッパオリンピック委員会(EOC)総会

【セッション概要】

日時: 2012年2月16日(木)午前9時15分～午後12時15分
 出席者: ロザンナ・キフェティ ヨーロッパオリンピック委員会
 テレサ・ザベル ヨーロッパオリンピック委員会
 ノベル・カリガリ ヨーロッパオリンピック委員会

【セッション内容要約】

■ ヨーロッパにおける女性とスポーツについて

ロザンナ・キフェティ (ヨーロッパオリンピック委員会)

- 女性アスリートのスポーツ参加率は上昇を続けている:
 - 北京オリンピックでは、女子の参加率が43%、ユースオリンピックでは46%
 - ロンドンオリンピックでは歴史上初めて女性が全ての種目に参加
- リーダーシップ、スポーツマネジメントにて女性の割合を増やすべき
 - ヨーロッパの国内オリンピック委員会(NOC)では Stefka Kostadinova が唯一の女性会長である
 - 49のNOC中、6団体/NOCsに女性が事務局長の地位にいる
- どうすればヨーロッパの女性とスポーツにおいてよりいい環境を築けるか
 - 資源と投資を戦略的に配置する
 - スポーツでは女性の競争相手は女性だが、社会では男性相手と競わなければいけない
 - どのようにアプローチするのか、コミュニケーションスキルの向上
 - 女性のマネージャー、コーチ、医者の割合を増やす

■ スポーツにおける女性のリーダーシップについて

テレサ・ザベル (ヨーロッパオリンピック委員会)

- 女性スポーツは過去20-30年発展してきているが、女性リーダーはまだ少ない
- なぜ女性のリーダーが必要か?
 - 女性のロールモデル
 - 意思決定権のある女性
 - スポーツ界にいる女性が代表されている気持ちになる
- 女性のリーダーに対する障害は?
 - 家庭の事情(子育て、両親の看護等)
 - 女性の方が子ども、障がい者のアスリート、会議でのお茶運び等に適しているという先入観
 - ロールモデルの女性が少ない
 - 指導をする側からは、女性は真剣に物事をとらえないと期待される
 - ステレオタイプ

- スポーツ界のネットワーク
- 女性は全ての仕事の範囲において達成できる自信がないと幹部ポジションに挑戦しないが、男性は自分さえ満足していれば候補者として立候補する
- 女性のリーダーを増やす対策？
 - 毎年、国際的なトレーニング、ワークショップを行う
 - メンター（助言者）によるサポート
- IOCの目的（国際オリンピック委員会が1996年に打ち出した）
 - 2000年までに少なくとも10%、2005年までに少なくとも20%
 - ヨーロッパNOCにおける意思決定権のあるポジションに女性が付いているのは、49のNOCの中から会長のポジションが1（ブルガリア）、事務局長には7団体／NOCs（アイスランド、ルクセンブルク、モルドバ、モナコ、スウェーデン、トルコ、ボスニア・ヘルツェゴビナ）
 - International Federation（国際競技連盟）での女性の割合
 - ◆ 3オリンピック国際競技連盟の会長が女性
 - ◆ 10オリンピック国際競技連盟（29%）において女性が理事として20%以上
 - ◆ 17オリンピック国際競技連盟（50%）において目標の数値最低10%以上に達している
 - ◆ 30オリンピック国際競技連盟（88%）において理事会メンバーに最低女性が一人いる
 - 2005年12月31日付：NOCでの女性の理事の割合
 - ◆ 62NOCs（32%）が女性が20%以上の割合を占めている
 - ◆ 148NOCs（77%）が目標としている10%以上の数値に達している
 - ◆ 182NOCs（95%）が理事会メンバーに最低女性が一人いる
 - IOCでの女性の割合
 - ◆ IOCの理事会には15人中2人の女性、Gunilla Lindberg（スウェーデン）、Nawal El Moutawakel（モロッコ）
 - ◆ 106のIOC委員の内19人が女性（17.9%）

■ 女性、スポーツとメディア

- ノベル・カリガリ（ヨーロッパオリンピック委員会連合）
- 1960年ローマオリンピック
 - 女性の割合12%（イタリア）／11.4%（世界）：メディア報道イタリア（0件）／世界（4件）
 - 1980-1990年代：イタリアにて初のテレビレポーター
 - 2000年-：女性ロールモデルが増えてきて、女性を利用してプロモーションするようになる
 - 現状：女性の参加率：イタリア（39%）／世界（42%）：メディアイタリア（30%）／世界（13%）
 - メディアにより、女性とスポーツへの先入観／スポーツ文化を変えることができる

■ 質疑応答

セッション会場の参加者より

- ヨーロッパオリンピック委員会（EOC）での「女性コミッション」は必要か？
 - 「女性コミッション」が対策となるとは限らない
- 女性は男性と競うのではなく、ロビーイングしながら一緒にサポートし合うことが必要
- ガラスシーリング「ガラスの天井」は自分たちで作っている
 - 統計的に女性は 10 の内 8 以上のスケールではじめてシニアポジションに立候補するが、男性は 10 の内 2 のスケールでもチャレンジする
- より多くの NOC がブライトン宣言に署名する必要性
- ヨーロッパでは女性アスリートのパフォーマンスは成功してきているが、女性の割合のテクニカルポジション（コーチ、審査員、メディカルスタッフ／医者、スポーツディレクター）が低下してきている
- ヨーロッパオリンピック委員会では、今回の会議から「アクションプラン」を提出するべき

3. オセアニアオリンピック委員会(ONOC)総会

【セッション概要】

日時: 2012年2月16日(木)午前9時30分～午後5時30分

出席者: オセアニア諸国の女性スポーツ委員

【セッション内容要約】

■ 要約

オセアニア地方の島々諸国を含む全体ミーティングをIOC会議で開催するのは初めてのことであり、ONOCにとっては、歴史的な日であると言えるだろう。オセアニア地域のスポーツ組織における女性理事の数は、世界的にも突出している。今回のワークショップでは、17カ所の国内オリンピック委員会(NOC)より5分間ずつプレゼンテーションを行い、相互の活動の理解を深めると共に、コミュニケーションのワークショップエクササイズや各NOCのアクションプランを立てるためのセッションなどを実施した。

■ 活動報告

オセアニア各国の女性スポーツ委員

- レポート
 - IOCの大陸別表彰に Rosie Blake が選出された
 - NOCにおける意思決定権のあるポジションに女性が付いている割合は、オセアニア地方は26.2% (独自のレポートでは30.4%) と大陸別ではトップである (アジア12.6%、ヨーロッパ14.1%、アメリカ大陸20.5%、目標値は20%)
- 新しい試み
 - オリンピック価値教育プログラム (学生、教師、スポーツ行政の担当者など)
 - ◆ 2日間のワークショップ
 - 国際オリンピックアカデミー (若者を対象とする)
- 17の各NOCより活動などのプレゼンテーション
 - 力を入れているスポーツ種目の活動状況、現在の課題、新たなプロジェクト (データベース開発) など
- コミュニケーションを高めるためのワークショップ
- WASOの戦略プランについて
- プランニングの立て方 (セッション)

4. アジアオリンピック評議会(OCA)総会

【セッション概要】

日時: 2012年2月16日(木)午後2時15分～午後5時10分
 出席者: ジャック・ロゲ 国際オリンピック委員会 会長
 アニタ・デフランス 国際オリンピックイン委員会 女性スポーツ委員会代表
 アジア諸国の女性スポーツ委員

【セッション内容要約】

■ 国際オリンピック委員会より

ジャック・ロゲ (国際オリンピック委員会会長)

- 様々な理由 (経済的・政治的・社会的理由) で女性のスポーツ参加が遅れているが、それを改善していかなければならない。
- 高いレベルの競技者だけでなく、草の根レベルの女性アスリートを増やしていかないといけない (パフォーマンス的観点)
- 女性のスポーツ進出をサポートするメンター (助言者) を増やしていかなければならない (教育的観点)
 - 女性の方が選手の平均年齢が低い
- サウジアラビアの女性アスリートについては、現地オリンピック委員会としかるべき対応を取っている。評価は五輪後に行われることになる。
- オリンピックの女性選手比率上昇
 - 1980年24%からロンドン五輪で45%と予測

アニタ・デフランス (国際オリンピック委員会女性スポーツ委員会代表)

- スポーツは生まれながらにして持つ権利 (Birth Rights) であり、この大切な権利を子どもたちの世代に受け継いでいかなければならない

■ アジアオリンピック委員連合の活動報告

アジア各国の女性スポーツ委員

- 女性のスポーツ界進出は増えてきているものの限定的で伸びは遅い
 - NOC 会長は女性で一人だけ (インドネシア)
- アジア大会の拡大
- 詳細は別添資料参照

■ 質疑応答

セッション会場の参加者より

- IOC Women and Sport Commission における「Women and Sport」という名前を、「Diversity」に変えた方が良いのではないか？
 - アジア諸国ではまだ「女性」を強調する必要があるので、名前を変える必要はないのではないか。
 - 男性からのサポートを得るという意味でも「女性」という言葉は必要
- 国際的組織で指導的立場に立つための選出方法でのノウハウが必要
 - 少なくとも女性が立候補する素地ができなければリーダーは生まれない
- 女性は出産・育児などに時間を取られ、競技に専念できないのが現状
 - 男性が子育てして女性アスリートの活躍をサポートするような社会システムを長期的視点から確立するという選択肢もある
- 「話し合いだけ」の状況はもう止めて行動に移す時
- Capacity Building（能力強化・向上）の必要性
 - 女性幹部を育てようとする動きがあるが、適任の女性が見つからないのも事実
- より多くの NOC がブライトン宣言に署名する必要性

5. パンアメリカンスポーツ機構(PASO)総会

【セッション概要】

日時: 2012年2月16日(木)午後2時30分～午後5時30分
 出席者: ニコール・ホエバタージ 国際オリンピック委員会
 ノラ・シャフェル CAAWS

【セッション内容要約】

■ 「女性とスポーツの発展」におけるベストプラクティス(参考例)

ニコール・ホエバタージ (国際オリンピック委員会)

(5つのグループに分かれて「女性とスポーツの発展における参考例」について話し合う)

- グループ1
 - 全国的なセミナー
 - あまり知られていないスポーツ (non-traditional sport) を積極的に促進
 - 戦略的なアライアンス (政府とプライベート事業)
 - 規則の制定 (割当制) 男女共同参画
 - ネットワーク (ウェブ、Facebook, Twitter)
- グループ2
 - 政策: 女性のオフィシャルスタッフ (15%審査員) のゴールを設定して、達成できれば評価してボーナスを捧げる (インセンティブ)
 - リーダーシップ: 女性のリーダーがより活躍できるようスキル向上
 - 施設面での開発: 男性中心種目に多かったように、女性選手用の控え室がなかった等、施設面でのサポートをして女性選手がより安心してスポーツに専念できる環境をつくる
 - 草の根: 「国際女性デー」に “ZUNMBA” ダンスで認識を高めると同時に運動をする効果、関心度を高める
 - シニアチームがコーチとなり、若い世代の女性選手をサポートして応援
- グループ3
 - USOC: Diversity Working Group をつくり、参加率の統計を比較
 - CAAWS: 女性だけでなく、より男性/父親に関わってもらう
 - グアテマラ: リーダーシップの地位に女性のリーダーを毎年1人増やす
- グループ4
 - IOC にパートナーのプログラムをウェブサイト等にてプロモートしてもらう
 - 「ベストプラクティス」をリストアップする
 - ジェンダーのバランスができるよう戦略的に計画し、タスクフォースグループを作成
 - IOC のメンターシッププログラム

- グループ5
 - サウジアラビア：男女共同参画へのサポート
 - PASO が引き続き「パンアメリカン大会」において男女参画をサポートし、女性がより関われる環境をつくる
 - 2016年のブラジルオリンピックを利用して女性をサポート：女性のロールモデルにより少女／若い世代の道を切り開き、関心度を高める

■ 「パンアメリカン大会」において、どのスポーツ種目の女性参加率を増やす事ができるか？

ノラ・シャフェル (CAAWS)

- 2011年の「パンアメリカン大会」の男女参加率のデータ（別紙参照）をもとに、まだ平等ではないスポーツ17種目の中から選び、どのようにして男女平等にできるか話し合う
 - 以下8種目が各団体／国から選ばれた
 - ◆ サイクリング
 - ◆ ラグビー
 - ◆ 射的
 - ◆ 水泳
 - ◆ トライアスロン
 - ◆ ウエイトリフティング
 - ◆ テニス
 - ◆ セーリング
- どのようにして上記8種目の女子参加率を向上させることができるか？（
 - 国内・地域レベルにおいて、より女性が参加でき、競争できる環境をつくる
 - まだ新しいスポーツでは「資格基準」が高すぎるのでそれを下げる
 - 「タレント発掘」を今のうちから行う
 - トレーニングへの奨学金制度
 - ユースゲームにおいて、より上記のスポーツを積極的にサポートする
 - メディアを味方につけて、認識度を高める
 - 上記種目において優れている国と今後発展したい国が「シスターフッド」（女性同士の連携）を結ぶ
- 上記の結果を各国に報告してもらい、実践的に実施してもらう

6. スポーツ界の女性リーダーシップ(Leadership Views on Women in the World of Sport)

【セッション概要】

日時:	2012年2月17日(金)午前9時30分～午前10時30分		
出席者:	ジャック・ロゲ	国際オリンピック委員会	会長
	アニタ・デフランス	国際オリンピックイン委員会	女性スポーツ委員会代表
	マージョン・カマラ	国連女性の地位委員会	会長
	ラクシミ・プリ	国連女性	事務局長代理
	ナハヤティ・アセガフ	列国議会同盟(IPU)	会長
	ロード・サバシチャン	ロンドンオリンピック大会組織委員会	委員長

【セッション内容要約】

■ IOCの歴史と女性リーダーシップ

ジャック・ロゲ（国際オリンピック委員会）会長

- 男女共同参画：米国では8回（夏季4回／冬季4回）オリンピックが開催され、フランスでは5回。この会議の開催地であるロサンゼルスは2回（1922年、1984年）開催され、どれだけ男女共同参画が発展してきたかがわかる。1922年には女性の参加率が9%、1984年には24%。その後、女性参加率が上昇して2008年の北京オリンピックでは42%以上。「インスブルック冬季ユースオリンピック」では45%。「2012年ロンドンオリンピック」でははじめて女性がすべてのスポーツ種目に参加（シンクロナイズドスイミングにより男子より女子が1種目多い）。
- リーダーシップ：「オリンピック・ムーブメント」は発展してきているが、まだ達成したいゴールには到達していない。男女共同参画とリーダーシップにおいては、女性とスポーツの発展、リクルート、メンターにおいてまだ足りない。スポーツはあらゆる社会的な弊害を取り除くことができ、スポーツを利用することにより自信をつけて自尊心を高め、次の世代にも役立っていく。
- IOCの影響：「1996年アトランタオリンピック」では26のNOC、「2008年北京オリンピック」では8のNOCが女性を送り出さなかった。サウジアラビアのダルマ・ラシュディ・マルハ（Dalma Rushdi Malhas）は、「2010年シンガポール夏季ユースオリンピック」に出場し、馬術競技で銅メダルを獲得。このような例をどんどんサポートしていきたい。世界中の多くの組織と同様、オリンピック・ムーブメントは2007年まで時間がかかった。ジェンダーの平等は、人権保障の次に大事であるという事実を認識している。女性は1900年第2回オリンピックで競技に参加。従来の多くの女性選手がグローバルなプラットフォームを築いてきた。1984年初のアラブ女性、エル・ムータワキルの金メダル獲得により、スポーツをイスラムの女性にとって大きな前進であった。
- 今後のオリンピックの影響：この夏、ロンドンオリンピックでは40億人以上がテレビ、インターネット、携帯を通じてオリンピックへのアクセスがある。その内半分の観客が女性／少女であり、オリンピック大会が男女平等を促進させるのに役立つ強力なサポートとなる。他にも、新しいユースオリンピック大会も効果的なツールであり、男女混合イベント、教育・文化プログラムの推進を行う。
- 男女平等：平等は本質的なものであるが、まだスポーツでは成り立っていない。今回の会議では、我々のジェンダーに関わる今後の課題を完全に網羅している。参加者はコーチング、アドミニストレーション、メディアとスポーツビジネスのすべての面において必要である。我々はオリンピック・ムーブメントに寄与する義務がある。

- 国連：国連とIOCにて、ジェンダーの平等を促進することは不可欠な要素である。今日では、IOCはスポーツプログラムを通じて学校をより魅力的に、国連と一緒に暴力防止、より健康的な生活、HIVを避けるために予防する方法、国連との環境問題における目標を達成できるようサポートしている。
- ジェンダー平等：これらの努力により、我々はジェンダー平等という国連ミレニアム目標を実現しようとしている。すべてのミレニアム目標の中でも、ジェンダーの平等が最も重要であり、我々は世界が直面しているすべての課題に対処するため、女性にエネルギーとパワーを与えるべきである。我々の将来は、男性と女性一緒に歩む事で、あらゆる人種の知恵と恩恵によりはるかに明るくなる。スポーツは様々な社会的弊害を治すことができる。あらゆる人間のインタラクション／相互作用において、男女平等をもたらす力が必要。もし態度を変える事ができなければ、参考例によって導く事ができる。スポーツを利用することによって少女／女性に自信をもたせステレオタイプを変えていける。もしそれができれば、我々は娘と孫娘に、息子と孫息子のためのより世界を築くことができる。

■ 国連女性の地位委員会における女性のリーダーシップ

マージョン・カマラ(国連女性の地位委員会会長)

- 毎年恒例の国連女性の地位委員会の会議が来週ニューヨークにて行われるが、まだ遅れているキーエリアは以下の内容である
 - 政治界での男女における参画率
 - 男性と女性の収入の違い
 - シニアポジションへの移動の難しさ
 - あらゆる暴力問題
 - その他の権利の侵害
- 女性の関わりはかなり広がってきており、その内でもスポーツが各エリアのバトルグラウンドにて関わってきている
 - 教育と健康へのアクセス
 - リーダーシップと意思決定権を有する地位への参画率
 - 公共の場での若い世代の女性の活躍
- スポーツは生涯、小さい頃から老後まで女性をサポートし、情報の共有、関心が高まるコミュニティをつくり、ネットワークの強化につながる。国連でも、スポーツの役割、男女平等の問題についての重要性の認識も高まってきている。最近の例としては、2010年11月23日に総会が行われ、決議文で「スポーツが教育、健康、発展と平和を促進させる意味があること」があげられ、スポーツを利用して少女と女性により力を与えて応援することが強調された。
- 国連女性の地位委員会の現状:45のメンバー国により、毎年2週間2月中旬から3月上旬にかけて会議を行い、男女平等の割当制を促進、現在約束されている内容の進捗状況／実践されているかを監視し、そして新しいアクションへの合意等を話し合っている。政府からの参加だけでなく、数多くの非政府の組織も参加しており、どのように男女平等に関して今後進めていくべきかの戦略を立てている。2012年には600のNGOsが登録している。
- 国連女性の地位委員会の法律とポリシー:男女平等、女性により力を与えることに焦点を当ており、スポーツと体育・身体活動における2つの基本的なガイド／文書がある。
 - 1979年の総会で採択された「女性へのあらゆる差別をなくす」

- ◆ 10条と13条において、教育、社会、経済のためにも男女共にスポーツに積極的に参加する
- ◆ 5条において、男性と女性の差別、ステレオタイプを変える
 - 1995年の第4回国連女性会議の北京行動綱領
 - ◆ 別の視点からスポーツの重要性を強調：教育とスポーツのリンクをつくり、スポーツ施設へのアクセス、幅広い範囲での女性とスポーツのサポート：コーチ、トレーニング、国際と国内の参加率。女性と少女が積極的にスポーツに参加できる環境をつくる。
- オリンピック統計：アフリカ大陸ではオリンピック委員にて意思決定権をもつ女性が20%という目標に近づいてきている。IOCと国連女性の地位委員会が「女性とスポーツ」におけるキードライバーであり、2009年以来、国連女性の地位向上委員会にIOCも参加している。IOCがより男女平等に力を入れて奨励することを望み、女性とスポーツでの障害をより明らかにしていくためにも、国連とIOCのパートナーが重要。

このIOC世界女性会議では現状を把握しながらギャップを認識して、アクションをおこし、女性とスポーツのムーブメントを再確認して変化を起こすべき。

■ 女性のリーダー：ロールモデル

ラクシミ・プリ（UNウィメン事務局長代理）

- UNウィメンについて：75カ国において、市民団体／民間と国の政府とのパートナーシッププログラムの仕事を提供。
- 焦点をおいている内容は以下の3つ
 - より多くの女性政治参加者の声と意思決定権をもつ女性（スポーツを利用）
 - より経済的に活躍できる女性のエンパワーメントを拡大（プロフェッショナルスポーツを利用）
 - 平和を築く "平和をつくり、平和の維持"
- 課題：どのようにジェンダー平等に投資するか？
- UNウィメンが確立された理由の一つとしては、グローバル、地域、国際的に女性への投資不足である。今では45の政府機関と一緒に、予算が適切に男女平等に与えられるように働きかけている。IOCと協力しながら、スポーツ省、ジェンダー平等／男女共同参画の団体と一緒に、国家予算と計画において女性への投資を提供していくべき。残念ながら、投資では二重の危険性に陥っている- スポーツへの投資不足、そして女性への投資不足。我々はその特定の領域を改善するために協力する必要がある。
- UNウィメンの戦略の重要な一面には、女性の声を高め、女性リーダーの役割を増やし、変化を集約することができる。スポーツはちょうどそれをする手段として利用できる。UNウィメンの事務局長ミシェル氏は「すべての女性リーダーは、地域社会、組織や国どこでも変化を起こすエージェントとすることができる」と話し、ガンジーも「見たいと思う世界の変化にあなた自身になりなさい」と述べている。国際オリンピック委員会の女性スポーツ委員会委員長アニタ・デフランスこそが女性のロールモデルであり、それをフルにサポートする会長ジャック・ロゲという男性のサポートがあるから成り立っている。
- 男女共同参画：男女差別にはあらゆる層、社会的、文化的、宗教とあり、スポーツは特に発展途上国の課題。表彰者の一人、マニーシャは昨日のオープニングセレモニーで、「あなたの今後のビジョンは何ですか？」という質問に対して、「スポーツのまわり／環境において役員室、スタジアム内等の女性の活躍が増え、違ったキャパシティで変化すること」と答えた。
- この会議では、我々はどこにギャップがあり、どのエリアに変化をもたらす支持、投資をするべきかを

見極める必要がある。

- ジェンダーのステレオタイプ（男性はボールストライカー、女性はチアリーダー）
 - 構造とスポーツムーブメントについて
 - 社会の受け入れ体制 - 男性と女性であることを意味するもの
- 例：日本の女子ナショナルサッカーチームは昨年の福島（東日本）災害発生後、全国民の精神力となり日本を明るくし「女性スポーツ」というステレオタイプを変化させた。リーダーシップの課題として、「ガラスの天井を破るべき」とあるが、「床をあげる」ことも必要。これはプロ選手だけに限らずプロ選手以外にも値する。例えば、常識を覆したバングラデシュ出身のサーファーNasima。これらのロールモデルが必要である。
 - またロールモデルを提供するだけでなく、このような会議のキーとなる点は、女性とスポーツの場を引き続き作ること。スポーツの利点には、力強くなること、忍耐力、チーム精神、連帯、交渉する能力、健康、包摂（インクルージョン）、リスクをとる、自尊心を高める、「どうやって勝ち、どうやって負けから回復するかを学ぶ」とビリー・ジーン・キングが昨日も話していた。このようなスポーツからの偉大なギフトを、この会議で強調するべきである。スポーツは社会的孤立、貧困エリアに住む交通の問題を解決し、安全な場所、アクセス、よりコミュニティになじめるような場をつくることができる一自己実現を確立させる。「スポーツ」は人間の権利だが、「女性の権利」であるべきである。
 - IOC 世界女性会議の目的
 - 過去 4、5 年発展してきたものも含め、新たにビジョンを再設定すること。アイデアや目的を述べ、支持する団体をより増やし、リーダーのネットワークコミュニティを構築と強化、そしてまだ設置されていない投資、特別なエリアに拍車をかけサポートすること。
 - ウイルマ・ルドルフ（アメリカ陸上オリンピック選手：4 歳で小児麻痺にかかりリハビリで克服したメダリスト）は「夢の力と、精神の影響を過小評価してはいけない。私たちは皆、偉大なことをやり遂げる潜在能力をそれぞれ持ち合わせている」というが、それをスポーツの領域で 52%達成できれば、我々は真の変化を起こすことができる。

■ 列国議会同盟(IPU)の女性リーダーシップ

ナハヤティ・アセガフ（列国議会同盟会長）

- IPU は、国連と協力して、政治的意思決定過程における女性の参画について、各国議会のデータの収集、継続的な調査研究と提言を行っている。
- 「世界民主主義宣言」(Universal Declaration on Democracy)
 - 1997 年カイロ（エジプト）で開催された IPU 評議員会において「世界民主主義宣言」(Universal Declaration on Democracy) が採択された。その第 1 部（民主主義の原則）第 4 項では、「民主主義の実現には、男女がその違いから相互に豊かさを導き出し、対等にかつ補い合っている社会の営みにおける男女間の真のパートナーシップが必要である」(23) と述べられている。
- 世界の女性人口：35 億人（世界人口の内 12 億人が貧しく、その内女性が 70%を占める）
- グローバルの女性議員率（19.86%）
- 列国議会同盟（IPU）と女性エンパワーメントの歴史
 - 1978 年に 列国議会同盟内の女性幹部会を作成

- 1986年に女性議員に関するセッションを開催
- 1999年4月女性議員委員会が設立
- 1999年に女性議員の地位とルールについての会議が開催
- 列国議会同盟（IPU）の改革と宣言について
 - 1997年ニューデリでの政治における男性と女性のパートナーシップをテーマとする特別会議を開催
 - 2008年「北京議会宣言」
- 課題
 - 女性議員の少なさ
 - 差別：教育、発達させるスキルとトレーニング不足
- 何ができるか？
 - 女性の参加率と女性の意思決定権ポジションの増加
 - アクションを促進
 - 予算：国際的／国内的でのスポーツにアクセスできる環境
 - 様々な割当制度を支持（世界において30人以上のスピーカー）
 - エリートアスリートをロールモデルとする（例：初のイスラム教／黒人女性オリンピック、エル・ムータワキル）

■ ロンドンオリンピックと女性

ロード・サバシチャン・コー（ロンドンオリンピック組織委員会会長）

- キーとなる要素
 - ポジティブ・アクションは、ポジティブな変化に影響を与える
 - ポジティブな勢いを維持するためのロールモデルの重要性- アクションを起こす
- ロンドンオリンピックのビジョン
 - 道をリードし、より多くの若者を関わらせる
 - ロンドンオリンピック組織委員会は2005年の大会開催権獲得以来、世界各国、特に途上国で「インターナショナル・インスピレーション」プログラムを実施してきた。このプログラムは、各国の地域コミュニティ、教師らと協力してスポーツイベントを実施し、コミュニティの子どもたちにスポーツの力を実感してもらうことを狙いとしている。本年7月25日、同プログラムがこれまでに世界17カ国で展開され、公約通り延べ1200万人の子どもたちにスポーツの楽しさを届けることに成功している。（発展途上国でロールモデルのリーダーを務めるシェリーのビデオ閲覧）
- ロンドンオリンピックの女性参加率：
 - たくさんのシニアポジションに女性がついている
 - 初の夏季オリンピックスポーツディレクターのジャッキー氏
 - 男女比50%

-
-
- 秘訣：シニアポジションからはじめ、人事／採用に力を入れ、ダイバーシティグループを作成、月間レポートにて随時その状況を報告、トレーニング、コミュニケーションすべてを徹底
 - ロンドンオリンピック委員会の女性割合／採用結果：
 - 人事部 60%
 - 財務部 59%
 - 法務部 54%
 - 建築 50%
 - ボランティア 54%
 - 30歳以下が 29%
 - 黒人／アジア人のマイノリティー17%
 - 障がい者 7%
 - ロンドン企業／団体でも、ダイバーシティの比率を初めて達成した機関となった

7. 進歩に向けたパートナーシップ(Partnership for Progress)

【セッション概要】

日時:	2012年2月17日(金)午前11時～午後12時30分		
出席者:	アン・ストック	米国国務省教育文化局	国務次官
	ローランド・リッチ	国連民間連携室	室長
	ジーナ・ドロソス	P&G	グローバルパーソナルビューティー責任者
	パット・マクウェード	国際自転車競技連盟	会長

【セッション内容要約】

■ “スマート・パワー”アプローチによるスポーツを通じた女性・少女の支援

アン・ストック（米国国務省教育文化局国務次官）

- スポーツは社会的・経済的繁栄をもたらすツールになる
 - より多くの女性や少女にチャンスを与える
- smART power アプローチ
 - 文化的幸福に対して個人が自覚的に取り組むサポートを行う
 - <http://exchanges.state.gov/cultural/smartpower.html>
 - 以下の3つの視点から取り組む
 - ◆ メンターシップ
 - ◆ ネットワーク
 - ◆ サポート

■ 進歩に向けたパートナーシップ

ローランド・リッチ（国連民間連携室室長）

- UN Democracy Fund（国連民間基金）
 - 民間社会との関係を重視し、以下の6つの視点に注力
 - ◆ 地域開発
 - ◆ 法律と人権の順守
 - ◆ 民主主義の体現
 - ◆ 女性
 - ◆ 若者
 - ◆ メディア
 - 全世界で400のプロジェクトを実施
 - ◆ 世界各地のプロジェクトは以下参照
 - ◆ http://www.un.org/democracyfund/worldwide_index.html
 - 政府から支援先を指定する圧力がかかるが、独立性を保つためこれに屈しないように努力

- 女性とスポーツに注力する理由
 - 公平 (Fairness) と「平等」 (Equity) を体現する
 - 現状を変える
 - 社会を変えるために政治を変える
 - UN のブランド力を用いる

■ リーダーシップを通じたパートナーシップ

ジーナ・ドロソス (P&G グローバルパーソナルビューティー責任者)

- スポーツと同様にビジネスでもリーダーシップが必要
- なぜ P&G がスポーツを支援するのか
 - 「Touching and improving Lives」 のコーポレートスローガンに合致
- 代表的なプログラム
 - Save the Children
 - ◆ <http://www.businesswire.com/news/home/20110818005915/en/PG-Partners-Save-Children-Provide-800000-Refugees>
 - ◆ 生徒を学校に行かせ、スポーツに接する機会を作る
 - Mean Stinks
 - ◆ <http://www.youtube.com/watch?v=AqLUWSlvohA>
 - UNICEF
 - ◆ http://www.pampers.com/en_US/unicef/
 - Make a wish Foundation
 - ◆ <http://www.brandchannel.com/home/post/2011/01/09/Taylor-Swift-CoverGirl-First-Luxury-Line-Facebook-Promotion.aspx>

■ 機会均等をどのように実現したか

パット・マクウェード (国際自転車競技連盟会長)

- 女性による自転車競技
 - 1984年に「ロードサイクリング」として導入
 - それ以降、多くの女性自転車競技が作られた
- 女性のための環境整備も並行して進められた
 - World Cycling Center を設立し、男女が同じ環境でトレーニングを積むことができるようになった
 - トレーニングプログラム・プラットフォームの開発 (アマチュア・ツール・ド・フランス)
 - 平等の機会のためのリクルート計画
 - ◆ 指導者層に多くの女性リーダー輩出を促進することを目的

8. 持続可能な責任へのペース設定(Setting the Pace for a Sustainable Responsibility)

【セッション概要】

日時:	2012年2月17日(金)午後2時30分～午後4時		
出席者:	ドナ・デ・バロナ	国際オリンピック委員会	女性スポーツ委員会委員
	ロビン・ミッチェル	国際オリンピック委員会	オセアニアオリンピック委員連合議長
	マリソル・カサド	国際トライアスロン連合	会長
	ライア・マティラ	IWG	共同議長
	ベング・チョー・ロー	国際オリンピック委員会	女性スポーツ委員会委員

【セッション内容要約】

■ ペースの設定:各国オリンピック連盟の議題

ロビン・ミッチェル（国際オリンピック委員会オセアニア国内オリンピック委員会会長）

- オセアニアのオリンピック関連機関における指導者の男女平等の状況
 - 各国オリンピック委員会での女性指導者の増加
 - オリンピック委員会の40%が女性
 - 8人の女性が副会長やその他重要なポストを占める
 - 学歴の観点から多くの女性が指導者の条件を満たす
- 女性リーダーの更なる育成のために教育の必要性
 - オセアニアスポーツ教育プログラム：コーチ、運営者の育成
- 教育省やスポーツ省、地方政府との協力の必要性
- その他、女性指導者を増やすための施策
 - ネットワーキングの機会提供
 - メンタリングプログラム

■ ペースの設定:各国際競技連盟の議題

マリソル・カサド（国際トライアスロン連合会長）

- 国際競技連盟（IF）における女性指導者の現状
 - 女性が会長を務める国際競技連盟は2つのみ
 - トライアスロン連合はその一つ
 - 将来的には20%以上の連盟が女性の会長を持つべき
- トライアスロン連合が男女平等で成功した理由
 - トライアスロンの歴史が比較的浅い
 - トライアスロン競技が男女同時期に開始
 - 初代会長の女性への理解
- 今後の展望

- 政府による女性スポーツへの投資増加により女性のスポーツ界への進出が促進されるのでは
 - ◆ 女性リーダー養成のための教育とメンタリングプログラム導入の重要性

■ ペースの設定:グローバル・ネットワーキングの議題

ライア・マティラ (IWG 共同議長)

- IWG の目的と活動に関して
 - 女性の権限を向上し、持続可能なスポーツ文化の創造を目的とする
 - ブライトン宣言から 20 周年である 2014 年にヘルシンキにて第 6 回 IWG 世界女性スポーツ会議の開催
 - 女性スポーツのための革新的なパートナー・ステークホルダーという役割
 - 女性スポーツに興味を持つ全ての人々・団体が参加可能
 - 自発的な活動母体
 - 女性スポーツに関する情報の管理と提供

■ ペースの設定:各地域の議題

ベン・チャー・ロー (国際オリンピック委員会女性スポーツ委員会委員)

- アジアの一般的な現状に関して
 - アジアはオリンピック参加国数において大陸別で最大
 - アジアにおける多様なイベントの開催
 - ◆ 地域独自のスポーツイベント
 - ◆ オリンピック対象外の種目のための大会
 - 多様な文化、言語の存在
- アジアにおける女性とスポーツ
 - 女性のスポーツ界への進出の増加
 - ただ、運営者、スタッフ、指導者の数は依然低い状況
 - また、3つの国では、これまで女性選手のオリンピック参加が一切無い
- IOC 女性スポーツ会議のアジアへの影響
 - 財政的、技術的なサポート
 - 女性スポーツの啓発活動の開催
 - その他、各国オリンピック委員会主催による女性関連イベントやワークショップの開催サポート
- その他の課題
 - パートナーシップの増加の必要性
 - 目的達成のために女性自身が積極的に主導を取るべき
 - ネットワーキングやベスト・プラクティス共有の重要性

9. 行政、立法、そして姿勢(Government, Legislature and Attitudes)

【セッション概要】

日時:	2012年2月17日(金)午後2時30分～午後4時		
出席者:	Niels Nygaard	デンマークオリンピック委員会	会長
	Nancy Hogshead-Makar	元オリンピック選手	タイトルIX 専門家
	Marit Myrmael	国際オリンピック委員会	女性スポーツ委員(ノルウェー)
	Ann Cody	パラリンピック選手	

【セッション内容要約】

■ 優れたガバナンスは男女平等へ

Niels Nygaard (デンマークオリンピック委員会会長)

- デンマークでは、Ministry of Equality (平等省) が機会均等や男女平等に関する政策を制定している
- 現在、各スポーツ連盟 (NF) の要職に就く女性の数は約1/3ほどになってきているが、要職につく女性の数は、女性アスリートの数に呼応していなければならないと認識している
 - これらは行動プラン、スポーツ行政トップからのサポート、メンタープログラム、教育、ネットワークなどから実現していくことになる
- デンマークの現状は、40% が女性アスリート、18% が理事会のメンバー、そして30% がNOCの理事会メンバーである

■ 女性のスポーツ参加を高める政策の効果について

Nancy Hogshead-Makar (元オリンピック選手・タイトルIX 専門家)

- ナンシーは、オリンピックに出場した水泳選手であり、現在は弁護士として活動している。WSFとも関係している。
- 弁護士の立場から、いくつかの基本的な法律 (US Constitution, Public Accommodations Laws, Ted Stevens Olympic and Amateur Sports Act, Title IX, & Equal Pay Act and Title VII) について簡単に説明した。
- タイトルIXについては、以下のようにコメントした
 - 高校や大学でのタイトルIXの実施状況はよいが、特定のスポーツ種目の参加は州によって様々で、タイトルIXが解決できた状況ではない
 - ミシガン大 (“Her life depends on it”) とのコラボレーションを実施している
 - タイトルIXは女性の教育実施率の増加、うちの1/5に貢献している
 - 80% がタイトルIXに対して好意的である

■ “Quota”（割当制度）に関するケースについて

Marit Myrmael（国際オリンピック委員会女性スポーツ委員）

- ノルウェーの場合、12年後の女性のNOCにおける要職に占める割合（女性意思決定者の数を20%まで上げるという提案）はさらに悪化している
- 過去の方策や対策は、現在まったく効果を示しておらず、有効的でないことが証明された。
- そこで割当制度を政治やビジネスの場で導入した所、非常に良好な効果を上げることができた。
- 現在は、傘下のスポーツ組織から12,000ヶ所のスポーツクラブに至るまで、実施されている

■ 女性障がい者とスポーツ

Ann Cody（パラリンピック選手）

- 障がい者は健常者と同じチャンスを受け取るべきである
- 325 百万人の障がい者は全人口の10%を占め、そのうち25%が全世界の勤労人口にあたる。
- それでもまだ偏見を持たれているため、障がい者に関するスポーツ政策は急務であり、国際パラリンピック委員会でも女性障がい者アスリートの支援を強く打ち出している
- もっと多くの障がい者女性の参加を目指すこと、スポーツの場やプログラム、設備・装備などへのアクセスを向上することなどがゴールである
- 意思決定のできる立場へ障がい者の女性を増やすことは大切である

■ 質疑応答

質問には、割当制度に対する質問やコメントが最も多く、どのように割当制度を導入し、スポーツ連盟に20%のゴールを達成するように求めるか、ヨーロッパ以外の違った文化を持つ諸国でも実現可能ななどの質問やコメントがあった。これに対して、割当制度を導入し、推進することは可能であるが、各国の状況や政策にも配慮した進め方が必要などの応答があった。その他、セクシュアルハラスメント、障がい者へのハラスメントに関して、IOCの政策や方策が見えていないというコメントに対し、会場にいたノルウェーのカリ・ファスティング博士より、IOCのワーキンググループによる教育プログラムを開発中であることの説明があった。

10. 医学の重要性(Matters Medical)

【セッション概要】

日時:	2012年2月17日(金)午後4時30分～午後6時		
出席者:	ウグアー・エデナー	国際オリンピック委員会	医学委員会委員
	トーマス・ムライ	ハステインクス・センター	代表
	エリック・ビライン	UCLA 附属病院小児科	主任
	ラニア・エルワニ	国際オリンピック委員会	委員
	アイミ・ムリンズ	米国女性スポーツ財団	元会長

【セッション内容要約】

■ 競技資格の決定に関して:なぜ、女性に特化した競技区別があるのか？

トーマス・ムライ (ハステインクス・センター代表)

- 倫理学の観点から性別による競技区別の重要性
 - 競技の意義の維持
 - 公平性
 - 才能のある女性選手の認識
- 男女を区別する際に、(発育障害により) 男性の身体的特徴を持った女性選手をどのように扱うのが問題となる
- 男性の特徴を持った女性をどのように調査すべきか？
 - インフォームド・コンセントの必要性
 - 正確な基準の規定
 - 透明性のある検査過程の導入
 - プライバシーの保持

エリック・ビライン (UCLA 附属病院小児科主任)

- 医学的関連からの男女の区別に関して
 - 遺伝子的に発育障害のある女性 (男性と似通った身体特徴を持つ) はその他の遺伝子的特性が与えるものと同程度の優位性を持つ
 - ◆ 発育障害のみ特別に扱う必要があるのか？
 - 男女の身体特徴の境界を設定するのは容易な作業ではない
 - また、発育障害のある女性に治療を強要するのは困難を伴う

ラニア・エルワニ (国際オリンピック委員会委員)

- 競技者の観点から、女性の発育障害問題を知ることが重要である
- 同障害に関してより多くの研究が行なわれるべき
- また、公正な検査過程の導入を期待

アイミ・ムリンズ（米国女性スポーツ財団元代表）

- パラリンピック競技者の視点からの問題提起
 - 社会的価値から女性というものが定義されていることを認識すべき
 - 医学的な検査を行う際に、社会的な価値を検査過程において混同すべきではない

11. 教育を通じた女性・少女の支援(Empowering Women and Girls through Education)

【セッション概要】

日時: 2012年2月17日(木)午後4時30分～午後6時

出席者: Dagmawit Girmay Berhane 国際オリンピック委員会 女性スポーツ委員会
 リチャード・ラップチック Institute for Diversity ディレクター
 カリン・ロフストーム CAAWS 事務局長
 クリスティアン・パケレット ブラジルオリンピック委員会 ディレクター

【セッション内容要約】

■ 未来の女性リーダーを今日教育する

Dagmawit Girmay Berhane (国際オリンピック委員会女性スポーツ委員会)

- コーチは若い女性がバランスのとれた生活を送るために必要不可欠な存在
 - できるだけ早い時期に「いつ」「何を」「どのように」取り組むのか指針を示す
- 女性を教育することは、国や世代を教育することに他ならない
 - 歴史を学ぶ
 - 関係者を知る
 - 地域社会での適材適所の役回りを教育する
 - ◆ 社会の中でのステレオタイプの役割を押し付けない
- ロールモデル
 - 成功した女性アスリートを地域社会に派遣し、スポーツが人生を変える力を伝える

■ 教育は「失われた環」(missing link)か？

リチャード・ラップチック (Institute for Diversity ディレクター)

- スポーツの力
 - 多くの女性が社会的暴力（レイプ、性的奴隷など）に直面している
 - スポーツを経験した女性は高い教育を受け、社会的暴力を避けることができる能力を得ることができる
- NCAA の要職に女性は少ない
 - ヘッドコーチ、カンファレンス会長などの主要な役職は白人男性が独占している
 - プロスポーツに比べても女性が少ない
- メディアにも女性が少ない
- 女性のために戦うのは女性である必要はない

■ 成功するリーダーシップチーム構築のための男女教育

カリン・ロフストーム（CAAWS 事務局長）

- リーダーシップには多様性がカギ
 - 女性は思考プロセス、動機付け、対人関係構築が男性と異なる
 - 性別だけでなく、年齢や人種についても同様
 - 同質性の高い組織では、現状肯定はできてもより良い決断ができない
- 30%以上を女性が占める組織では、以下の点で平均以上を示した
 - 平均利益
 - 組織内のパフォーマンス
 - 効果的なコミュニケーション
- より多くの女性を輩出するためには
 - 説得力のある人材発掘技術
 - メンタリング・コーチングプログラムの開発
 - 成果測定
 - 非公式のコミュニケーションにも女性を入れる
- 女性が力を発揮するために必要なこと
 - 人脈構築力
 - 幹部選出プロセスの理解
 - 理事会を仕切る力
 - 幹部の中に仲間を見つける
 - スキルを磨き、経験を積む
 - 他の女性にもリーダーになるように促す
- 女性リーダーのサポート
 - 包摂的（Inclusive）な職場環境の整備
 - 準備やサポート体制なくリーダーにしない
 - 上級幹部からのサポートを得る

■ 周縁化された社会における女性教育・支援

クリスティアン・パケレット（ブラジルオリンピック委員会ディレクター）

- ブラジルの文化・教育活動
 - School Games
 - ◆ 14種類の競技を体験させる
 - COB in Communities
 - Champion Click

- ◆ 元オリンピックによる学校訪問
- Olympic Festival
 - ◆ 元オリンピックが経験を子どもたちと共有
- Puppet Show
- Photographer for a day
- Mobile (Bus) Library
- Health Food Game

12. ロールモデルとリーダーシップ(Role Models and Leadership)

【セッション概要】

日時: 2012年2月18日(土)午前9時~午前10時30分

出席者: ジーナ・ディビス 女優
ダイアナ・ナイアド 作家・ジャーナリスト・長距離スイマー

【セッション内容要約】

■ ゲストスピーチ①

ジーナ・ディビス (女優)

- 子どもの頃から、背がずば抜けて高く、たくさんのスペースを取っているみたいで、いつもどこかに隠れていたかった。バスケットボールやバレーボールのチームからいつも勧誘されていたが、その頃スポーツに参加することはなかった。大学生の時、芝居やモデルを始め、同時にスキーを楽しむようになってから、色々なスポーツを次から次へと体験していった。スポーツをきっかけとして、自尊心を取り戻し、自分は大きくてもいいんだ、スペースを取ってもいいんだと自分のイメージを改善できるようになった。その時、(米国)女性スポーツ財団に連絡を取り、色々なことを学ぶようになった。
- 映画の役から射撃やアーチェリーの技術を学ぶ機会もあった(アーチェリーのオリンピック選手である)。スポーツを通して一生懸命努力し、自分を信じることを学んだことはとても大切なことである。
- 「テルマ&ルイズ」という映画に出演した後、女性たちの反応はものすごく変わっていた。とてもエキサイティングで、力強い、演じたキャラクターがそんなロールモデルを果たしていたのだと思う。車から大声で話かけてきてくれたり、私の演じたキャラクターに同調してくれたり、中には「あなたの映画でたどった道を私もたどってみたのよ」と言う人までいた。一体どんなことになったんだろう?と思ったけど(映画中のキャラクターは、見知らぬ人と性行為をしたり、元夫を撃ち殺したり、警察から逃亡生活を続けて、最後はグランドキャニオンの底へ車もろともダイブするのである)。
- メディアに関してもう一つ気がついたことがある。娘が2歳の時(子どもは3人、双子の娘は現在9歳である)、見ていた子ども用番組のほとんどが男の子であったことだ。女の子のキャラクターは17%しかおらず、とてもアンバランスだ。しかもそれら女の子のキャラクターはとてもステレオタイプ化されていて、セクシュアリティを強調されていた(極端に細いウエストとか)。テレビを見れば見るほど、女の子たちには自分の将来に選択肢が少ないことを見ってしまうのである。
- 3つ目の大きな経験、女性初の大統領を演じたことである。そこで意識したことがたった16%しか議会に女性がいないということである。17%というのはとてもおもしろい数字のようだ。「Gender & Televised Sport Report」という報告書がある。そこによると テレビのスポーツ中継は96%は男子のスポーツである。最も中継の高い女性スポーツ(8%)も最近では1.1%に下がってしまった。この数字は、ドック・レースやフィッシングより低いのである。みなさんも興味があればこのレポートを是非読んでみて欲しい。またニュースの取り扱いにも男性と女性にはすごく差がある。では一体、どうやってこの男女差を是正することができるのだろうか?自然な変化と必要に迫られた変化があるだろうけど、私は自然に任せるほど忍耐強くない。ありがとう。

■ ゲストスピーチ②

ダイアナ・ナイアド（作家・ジャーナリスト・長距離スイマー）

- 子どもの頃、父が辞書を見せてくれて自分の名前の意味を探してごらんとやったことがあった。その意味はスイマーだった。地理学の先生は、水泳選手には全員地理学でAをあげると言った。そうして私はスイマーになった。自分を信じて一生懸命練習した。14歳の頃、慣れ親しんだ水泳の合宿中、信じていたコーチからレイプされた。自分で自分がとても嫌になった。同じく自分のコーチからレイプされた友人がいる（会場にいる彼女に起立をお願いする）。彼女はそこから立ち直り、“Star For”（スター・フォー）という組織を立ち上げた。その後、私は短距離水泳に戻ることはなかった。しかし、長距離の水泳競技に転向した。
- みなさんと共有したい話がある。自分を信じてその道を強く生きる女性たちの話である。伝統的な種族に生まれた女の子がいた。運動の得意なその子は、男の子用のズボンをはき、レースに参加して勝利する。しかし、男の子用のズボンをはいた罪に問われ、血だらけになるまで足を打たれ、今度やったら殺すと脅された。しかしその8歳の女の子は、私は今度も男の子のズボンをはく、そして勝つと言ってのけたそうだ。その言葉を再度実現した彼女は、レースの後無事に保護されたそうだ。オリンピックのスイマーであったナンシー（参加者 Nancy Hogshead-Makar）は、その後弁護士となり女性のための権利のために日々戦っている。
- ではみなさんは今何をしているのだろうか？中近東の女性たち、あなたたちは女性の尊厳のために日々戦っている。私たちに協力させて下さい。私たちは、常に戦っている、力強く。私たち女性は、自分の生きたい人生を生きるために戦っているのです。これは私が勇気づけるために使うファンファーレです。（トランペットで短いファンファーレを演奏）ありがとう。

■ 質疑応答

会場の参加者より

- 二人の力強いメッセージに感謝する各国の人々（フィンランド、アフリカ、オーストラリア、米国など）そうしたコメントに対して、ジーナやダイアナが追加で述べたのは、
 - メディアやテレビ放送は、我々にとって大きなチャレンジだ。一つのキーとして、アンカーに偏見のない若年層に登場してもらう方法もある
 - テニスは男女差が比較的少ないスポーツであるが、それでもセットの数に男女差がまだある（男子5セット、女子3セット）
 - ネットワークの世界では、意思決定のできる立場にいる女性がいなくなってる、私たちの声は届かないし、その状況に影響を与えることもできない
 - （初代WSF会長より）
 - ローカルメディアを使っていくことから始めよう、私たちは物事を変えたり、統合させたりすることができる、またインターネットを使って（早い時期から）もっと子どもたちのこともカバーしていこう
 - 国際法を設置し、セクシュアルハラスメントなどを働いたコーチは、いかなるスポーツにも、いかなる国々においても二度と仕事ができないようにする国際法の設定が必要である

13. 数字は知っている(It is all in the Numbers)

【セッション概要】

日時: 2012年2月18日(土)午前11時～午後12時30分

出席者: チンクオ・ウー 国際ボクシング連盟 会長
 バーナード・ラパセット 国際ラグビー委員会 会長
 イアン・ヘンリー ローボロー大学 教授

【セッション内容要約】

■ 数字は知っている

チンクオ・ウー（国際ボクシング連盟会長）

- 女性アスリートの参加について
 - 新しいスポーツが回数を重ねるごとにオリンピックに導入されてきているが、女性スポーツのサポート（イベント強化など）は続けていく必要がある。
 - 1900年のパリオリンピック（2.2%）から、2008年の北京オリンピックでは（42.4%）まで女性アスリートの参加は向上した。
- 女性の意思決定ポジションの参加について
 - 281の組織がブライトン宣言の採択、署名を行ったことをIWGに報告した
- 国際スポーツにおける女性リーダーシップの重要性を強調

■ 最初から正しく行う

バーナード・ラパセット（国際ラグビー委員会会長）

- 女性ラグビーの界の成長は著しい（成功している）
- 南アフリカでの第一回ワールドカップの開催は、40,000人のスタジアムの観客とテレビの視聴者によって観戦され、女性ラグビー界にとって革命的な出来事であった
- 2016年のリオデジャネイロオリンピックの男女ラグビーチームの参加に向けて、戦略プランの作成を開始、またアジアや他諸国への普及活動をはじめるとの予定

■ ギャップを狭めるために男女で何ができるか

バーナード・ラパセット（国際ラグビー委員会会長）

- NOCやIFを対象に行ったリサーチの結果の要約を発表
 - 2回の質問紙とインタビューを実施、組織内における女性の要職への選出に関する主な阻害要因とその対策を抽出した
- リサーチ結果
 - 選出前フェーズ
 - ◆ 阻害要因①：どの女性が要職に進められるかという認識の不足
 - ✓ 対策：候補者のリストを作成

- ◆ 阻害要因②：女性たち自身の要職に進むことへの消極性
 - ✓ 対策：女性候補者たちへの教育
- 選出時フェーズ
 - ◆ 阻害要因③：選出に関わるすべての過程が男性によって占められている
 - ✓ 対策：選出時に男性と女性数のバランスが取れるようインセンティブを与える
 - ◆ 阻害要因④：退職率が低い、新しいポストの空きがほとんどない
 - ✓ 対策：役員の任期などを定める
- 選出後フェーズ
 - ◆ 阻害要因⑤：（女性役員に対する）ネガティブな組織文化
 - ✓ 対策：組織文化を評価するようなシステムの構築
 - ◆ 阻害要因⑥：役員に選出されても、さらにその上のポストにつけない
 - ✓ 対策：役員の任期を制限する
 - ◆ 阻害要因⑦：女性スポーツの委員会やジェンダーに関わる仕事の分野に女性が隅に追いやられる
 - ✓ 対策：“イクイティ（公正）”に焦点を当てる。ジェンダーに焦点を当てることは、問題を浮き彫りにすることを容易にする。また候補者を募る時に、ジェンダーに関する内容を盛り込むことは、良いガバナンスである

■ 質疑応答

会場の参加者より

- お金のためにコーチやスポンサーと性的関係を持つ女性アスリートは少なくない。メディアはこの問題を認識し、問題に耳を傾けてもらいたいし、NF（国内スポーツ組織）などはそれを防止する責任があると思う
- ラフボロー大学のリサーチに関し、IOCやNFなどからフィードバックがあったか？
- 障がい者がボクシングのレフリーや審判になれるか？
 - （応答）レフリーは難しいだろうか、審判なら（リングの外）試験に合格すればなれる
- ボクシングでは、女性の要職などみてもまったく変化が見られない。
 - （応答）20%を目標に引き続き努力していく。
- 要職につく女性の割合を増やすための一番いい方法は何か？
 - （応答）ラグビーでは戦略プランで対応している。男女別のプランではなく、一つのプランにまとめている

14. スポーツ、平和、そして開発(Sport, Peace and Development)

【セッション概要】

日時:	2012年2月18日(木)午後2時30分～午後5時30分		
出席者:	ニコル・ホエバーズ	国際オリンピック委員会	委員/女性スポーツ委員会委員
	ファイサル・アリ・フセイン	国際オリンピック委員会	委員
	ベアトリス・アレン	国際オリンピック委員会	女性スポーツ委員会委員
	バーバラ・ケンダル	国際オリンピック委員会	委員
	ステファン・ジョーダン	ビジネス市民リーダーシップ・センター	エグゼクティブ・ディレクター

【セッション内容要約】

■ スポーツ、平和、そして開発:社会的弱者の課題への取り組み

ファイサル・アリ・フセイン (国際オリンピック委員会委員)

- スポーツは男女平等問題の先導的な役割を果たす
 - 北京オリンピックでは女性選手が48%を占める
 - ただ、発展途上国において男女平等な選手派遣を達成したのは3カ国のみ
- 発展途上国で女性スポーツを普及するためには平和の維持が不可欠
 - スポーツの更なる普及を目指した“Generation for Peace”プログラムの導入
<http://www.generationsforpeace.org/Userpages/>
- スポーツの力とは?
 - 社会的交流を促進
 - 行動変化への影響
 - 平和の創造
- スポーツを通じた平和創造を目的とする活動を更に実施していることが重要

■ 発展途上国における女性、スポーツ、そして平和

ベアトリス・アレン (国際オリンピック委員会女性スポーツ委員会委員)

- アフリカにおける現状
 - 女性の社会的地位が低い
 - 男女平等の促進の必要性
 - 雇用、環境保全、政治という観点から安全性を高める必要性
 - 多くの難民の存在
 - 男性によるセクシュアルハラスメントの蔓延
- 現状打開のための施策
 - スポーツを通じた平和、調和、男女平等の普及
 - 平和創造のための女性の役割の強調
 - IOCと国連の更なる協力

■ 完全な人間の創造:スポーツを通しての卓越性の追及

バーバラ・ケンダル（国際オリンピック委員会委員）

- 選手が、ロールモデルとしての役割を果たすための条件とは？
 - 競争心
 - 勤勉性と強い意思
 - スポーツへの愛
- 選手が、ロールモデルとして活躍する場を提供するために“Voices of Athletes”プログラムを設立
http://www.sportingpulse.com/assoc_page.cgi?c=2-3612-0-0-0&sID=47524
 - オセアニアオリンピック連盟と協力
 - Be a leader, Play True, Play Safe, Go Green という4つの価値が活動の指針
 - 選手がリーダーとして活躍するための様々なサポートの提供
 - ◆ ライフスキルの指導
 - ◆ ネットワーキングの機会
 - ◆ 今後の人生設計のための手助け

■ 女性への経済的機会の提供

ステファン・ジョーダン（ビジネス市民リーダーシップ・センター エグゼクティブ・ディレクター）

- スポーツとビジネスとの接点
 - 女性スポーツへの注目の劇的な増加に伴い、ビジネス機会が今後より増えるのでは？
 - 企業は既に、90億ドルをスポーツのスポンサーシップのために投資
 - インテルなどの大企業が、女性とスポーツに焦点を当てた社会貢献活動を開始
 - また、スポーツを通じたビジネススキルの向上を目的とするプログラムも多くの企業で導入
 - 経済的な効果を超えたスポーツとビジネスの繋がりも今後、期待することができる

15. スポーツビジネス(Business of Sport)

【セッション概要】

日時:	2012年2月18日(土)午後2時～午後3時30分		
出席者:	リディア・ヌセケラ	ブルンジサッカー協会	会長
	ジュディ・ミラー	コンラド・ヒルトン人道賞	副会長兼ディレクター
	ロバート・デ・コック	スポーツグッズ産業世界連盟	事務局長
	マリーシャ・グリーンバーガー	男女平等専門家	

【セッション内容要約】

■ 大会賞金の男女差

リディア・ヌセケラ（ブルンジサッカー協会会長）

- 女性スポーツは男性スポーツの後塵を拝している
 - 観客数、視聴者数、スポンサー数
- 賞金額は男女同額にすべきか？
 - 選手は同額に賛成、連盟は反対
 - 男女では収入が異なる
- 解決策
 - 連盟は女性スポーツを普及させるためにお金を使うべき
 - スポンサー企業に男女同額の賞金を出す、男女両方の競技に協賛するようにプレッシャーをかける
- 女性への賞金を男性と同額にしようとしても、男性優位の議会が認めない

■ 未来のアスリートは少女から始まる

ジュディ・ミラー（コンラド・ヒルトン人道賞副会長兼ディレクター）

- スポーツは女性を問題から遠ざける
 - スポーツは薬物使用、意図しない妊娠などを減らす
- 取り残された女性たちのために
 - 女性が人でなくモノとして取り扱われている国々がある
- 強い決意のもとで立ち上がっている多くの女性がいる
 - 一人の少女を助けることが世界を救う

■ 女性競技者の“正しい”服装デザインへの挑戦

ロバート・デ・コック（世界スポーツ用品工業連盟事務局長）

- 女性は購買活動の主要な担い手
 - 女性がスポーツグッズの70%を購買（男性グッズを買う女性も含む）

- 女性スポーツの歴史
 - 第1回オリンピックで女性の参加は禁止
 - 回数を重ねるごとに女性選手の比率が高まる
- ユニフォームの役割
 - 敵・味方の識別
 - 団結
 - 安全
 - パフォーマンスを高める
- 問題点
 - イスラム圏の女性はIOCのドレスコードに反対
 - バドミントンにスカートは必要か？
- 解決策
 - 女性の意見を尊重
 - スポーツを尊重
 - 文化の相違を尊重

■ スポーツビジネスと女性・少女のための倫理規範

マリーシャ・グリーンバーガー（男女平等に関する専門家）

- 女性のスポーツへの参画は家庭や人生、国、経済に好影響を与える
- 世界中に困難に直面している数多くの女性が存在する
 - 飢えに直面している6割は女性
- スポーツは女性を問題から解放するツールになりえる
- 女性はリーダーに不向きというのは間違い
 - スポーツはリーダーシップスキルを磨く機会を提供する
 - 女性経営幹部の82%は小学校卒業後にスポーツ経験がある
 - 女性が参加したグループの方が集団知性（Collective Intelligence）が上がる
 - まだ女性の社会進出があらゆる職種で進んでいない

16. 女性スポーツとメディア(Women, Sport and the Media)

【セッション概要】

日時:	2012年2月18日(土)午後2時～午後3時30分		
出席者:	アラン・アブラハムソン	南カリフォルニア大学	教授
	モリー・ソロモン	NBC オリンピックス	エグゼクティブ・ディレクター
	ベニタ・フィッツゲラルドモスレイ	米国女性スポーツ財団	代表
	ゼギディ・モウラド	キャナル・フランス	編集者
	クリスティン・ベレナン	USA Today	記者

【セッション内容要約】

■ 女性スポーツのメディア報道に関して

モリー・ソロモン (NBC オリンピックス エグゼクティブ・ディレクター)

- スポーツ報道に携わる女性記者の増加
 - 例、南カリフォルニア大学のスポーツジャーナリズム大学院では、約9割の学生を女性が占める
- 女性が報道機関においてリーダーシップの地位を占めることが、女性スポーツの報道の増加に繋がる
 - 依然、男性がリーダーシップをほぼ独占するという現状
- オリンピックにおける女性スポーツの課題
 - ソフトボールの正式種目からの除外
 - 新種目導入の遅れ
 - ◆ 例、女性スキージャンプは、歴史的に非常に盛んである種目であるにも関わらず、バンクーバー五輪での正式種目採用は持ち越された
 - 女性スポーツへの対応の遅れは、会長を中心としたIOCのリーダーシップのなかで女性スポーツ問題の優先順位が低いことを意味するのでは？

■ ファッション優先、スポーツは二の次:メディアは間違ったことを報道しているのか？

ベニタ・フィッツゲラルドモスレイ (米国女性スポーツ財団代表)

- 元オリンピック選手という視点からの意見
- 女性アスリートの報道を増やす必要性
 - 米国において、女性のスポーツ参加は約40%を占めるに関わらず、スポーツ報道においては6-8%のみ占めるという現状
- 女性アスリートの報道の際に、性的な描写ではなく、スポーツ選手として描写を行うべき
 - ケーン博士(ミネソタ大学)の近年の研究によると、女性選手の性的描写は、それを目的としている消費者のみの興味を引くだけであり、女性スポーツの一般的な興味の増加には繋がらない
- どのような服装で競技を行うかは、女性アスリートが決めるべき
 - ボクシングとバドミントンにおいて、女性アスリートヘスカートに着用を義務付けるという動きは女性スポーツを軽視するものである

- また、女性アスリートがどのように自分を表現するのは個人の権利であり、メディアはアスリートのイメージを、報道を通して歪めるべきではない

■ 女性アスリートのメディアの描写

ゼギディ・モウラド（キャナル・フランス編集者）

- 女性アスリートへの世間の関心を高めるためにメディアの果たす役割は非常に大きい
- ただ、女性スポーツもメディアにとって注目に値する立場であるのか、ということを見問うべき
 - 全ての主要スポーツイベントは男性スポーツであり、女性スポーツの市場規模は依然小さい
 - ◆ 例、昨年、フランスでもっとも人気があった女性スポーツのイベント（女子サッカーワールドカップ、フランス vs イングランド）でも 140 万人ほどの視聴者に限られた
 - 近年、女性のスター選手が少ないことが原因にあるのでは？
- メディアも女性スポーツを報道する際に、性的描写ではなく、競技者としてのパフォーマンスに注目した報道を行うべき

■ 主要スポーツイベントを報道する女性：平等は編集者の視点から始まる

クリスティン・ベレナン（USA Today 記者）

- オリンピック報道における女性スポーツの人気は極めて高い
- NBC の過去のプログラム制作において、シドニーオリンピック・オーストラリア代表のフリーマン選手に関する報道など、正しい観点から女性選手を描写したものも数多く存在する
- ケーブルテレビの台頭により、女性スポーツが報道される機会が増加する傾向にある

17. 性差のないスポーツ社会に育って(Growing Up in a Gender-Balanced Sporting Society)

【セッション概要】

日時: 2012年2月18日(土)午後4時～午後5時30分

出席者: サウジアラビア、トリニダード・トバゴ、ルワンダ、インド、ウクライナ、ジンバブエ、ウルグアイ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、フィジー、クロアチアの10か国から若手有望選手が登場

【セッション内容要約】

世界各国のユースオリンピック大会(YOG)に参加した選手およびジャーナリストの卵(Young Ambassador)

- 各国のYOG参加のスピーカーによる自己紹介
 - 各人個別の自己紹介が中心なので、詳細は省略
- 性差別のないスポーツ社会のために必要なもの(共通点)の確認
 - スポーツをする機会
 - 励まし
 - メンターシップ
 - 教育

18. 閉会式

【セッション概要】

日時:	2012年2月18日(土)午後5時30分～午後6時		
出席者:	ジャック・ロゲ	国際オリンピック委員会	会長
	アニタ・デフランス	国際オリンピックイン委員会	女性スポーツ委員会代表
	ラリー・プロブスト	米国オリンピック委員会	会長
	アントニオ・ビラライゴサ	ロサンゼルス市	市長

【セッション内容要約】

■ 閉会の言葉

ジャック・ロゲ（国際オリンピック委員会会長）

- 同会議の成果として、IOC は今後、女性スポーツの更なる発展のために以下の項目を実現する（参照：http://www.olympic.org/Documents/Commissions_PDFfiles/women_and_sport/Los-Angeles-Declaration-2012.pdf）
 - 女性のマネジメント・リーダーシップスキルの向上のためにより多くの資源の投資
 - IOC のリーダーシップにおける女性委員の最低人数の修正
 - 2012-13年における IOC 委員の選定に関し、より多くの女性を選出
 - 関連スポーツ機関においても男女平等を実現
 - 男女平等の実現のために様々な組織、機関との協力を強化
 - 女性のスポーツ参加（競技、マネジメントともに）の促進
 - 国連との協力関係をより一層強化